真宗高田派本山　専修寺

高田本山だより

令和８年 夏号
146

高田本山 HP

令和８年 夏号（第 146 号）/ 発行・令和８年６月１日 /〒514-0114　三重県津市一身田町 2819 番地　TEL 059-232-4171 www.senjuji.or.jp

大正15年より続く仏教文化講座が、今年１００回目を迎えます。みなさまのご聴講を、満開の蓮と共にお待ちしています。

仏教文化講座

今年も牡丹が咲きました

宗祖降誕会での本山褒賞

リレー法話

『かがやくいのちを繋ぐ』

周辺の田植えも終わり、青々と育つ稲にいのちのかがやきを強く感じる季節となりました。

自坊でも元気に育つ草を抜いておりました折、「この草も育とうとしているのですね」とお声をかけられ、いのちの健気なありようを教えられたことでございます。

この世の生きとし生けるものは、元気に育ち、やがて老いや死に向かって変わりゆく姿を見せてくれます。

私は保健師業務に携わり、そうしたいのちの喜びや悲しみに向き合う一方、決して変わることのない「永遠のいのち」を希求し、その中に生かされている不思議に、日ごと深く心打たれております。

坊守の方々と集まり世間話に花を咲かせる折にも、よく話題に上るのは、御同行の皆さまへ「変わらないいのちである阿弥陀様」をことばでお伝えすることの難しさです。

そのような中、今年のお七夜報恩講大講堂説教では、「箱根駅伝のたすきリレー」を糸口に、法を繋ぐというお話しを聞かせていただきました。阿弥陀様の温かな柔らかなお慈悲に触れるとともに、「私ども一人ひとりのありのままの日々の姿こそが、阿弥陀様を次世代へ繋ぐことになる」とお示しいただいたのです。

阿弥陀様をお伝えすることの難しさを痛感していた私にとって、「肩肘張らず、自分らしく阿弥陀様のいのちの中を歩ませていただけばよいのだ」というお教えは、大変ありがたいものでした。

人の想いは様々であっても、すべてのいのちをお救いになるという御本願の不思議に乗せていただけば、自然にお名号に頭が下がり、日々の生活をしっかり歩むことができます。その歩みそのものが、阿弥陀様のいのちを次世代に繋ぐ「たすき」となるのだと気づかせていただきました。

親鸞聖人は念仏弾圧や善鸞義絶といった深い悲しみの中で、「念仏のみぞまことにておはします」と仰せになり、阿弥陀様のお救いの中に生きられ、私どもに道をお示しくださいます。未熟な私ではございますが、欣求浄土の白道を慶びとしつつ、このかがやくいのちを次世代へと繋いでいけたらと願うこの頃です。

南無阿彌陀佛

三重県第十二組東部
松仙寺衆徒　的屋宝海

御本山御用達
鍵長法衣仏具店
京都市下京区油小路正面東入（中央局区内）
電　話　（075）371-0854・8181～2番
ＦＡＸ　（075）344-2701番
振替口座・0170-3-972番　郵便番号600-8344

創業1586年
松井建設株式会社
代表取締役社長　松井角平
執行役員支店長　小沢一彰
本　社　東京都中央区新川一丁目17番22号　☎03-3553-1150
名古屋支店　名古屋市中区栄五丁目28番12号　☎052-249-4771

浄土真宗なんでもQ&A

おひかり ～ろうそくの灯～

荘厳

古来より佛前には、器に油を湛えて火を灯す「灯明」が供えられました。

私が灯明を献ずることは、真実をあきらかにする佛の智慧を讃え、自らの煩悩の迷闇が除かれるとされたのです。

約千年前の中国「宋」の時代には、ろうそくのあかり「灯燭」も合わせて用いられるようになり、室町時代には日本でも法会に用いられた記録が残っています。

このように佛前の「ひかり」は「私が灯し・私が供え・私が功徳を重ねる」事が基本であり、今も多くのお寺では、境内・堂内での献灯が勧められています。

しかし、この【私が灯すひかり】という方向が佛によってひっくり返され、阿弥陀佛が途方もないご苦労の上に選ばれ届けられた、われらを照らす【阿弥陀様のおひかり】であったと頂いていくのが、お念佛のみ教えなのです。

御開山親鸞聖人は「阿弥陀佛は光明なり。光明は智慧のかたちなりと知るべし。」（『真宗高田派聖典』691頁「唯信鈔文意」）と示され、御和讃にも

智慧ノ光明ハカリナシ
有量ノ諸相コトゴトク
光暁カフラヌモノハナシ
真実明ニ帰命セヨ

（「浄土和讃」讃阿弥陀佛偈和讃　第二首）

とあらわされています。

「おひかり」は、佛がわれを念ずる智慧そのものであり、それはどのようなものも見捨てず、逃げるものこそ追いかけて抱きとめ、そのぬくもりは必ずお念佛申すものへと育て上げ、尽きない煩悩の闇を照らして打ち破る真実の明かりであると讃えられました。

私は、誰かを照らし、何かの役に立つ人生を送りたいと思っています。しかしそれは同時に、役立たずで誰かの迷惑となる人生を恐れているのではないでしょうか。

阿弥陀様の「おひかり」が、ろうそくのやわらかな光にあらわされ、私に「南無阿弥陀佛」の声となって響くところに、そもそも迷惑をかけねば生きていけぬ私であったとうなだれ、その私に恵まれる無数のおかげさまにうなずき、手が合わさる世界が開かれます。

「私が照らす」という思い上がりでなく、ただただ「私こそ照らされていた」と、ろうそくの「おひかり」を有難く仰がせて頂きましょう。

（教学院第三部会）

伝統を引き継ぐ職人舎
蒼築舎
Sochikusya Co.,Ltd
伝統的な社寺建築、古民家や一般住宅・店舗の修繕、リフォーム、リノベーションなど、自然素材を活かした壁や空間を提案します。
左官工事／建築工事／外構工事
〒510-0031 三重県四日市市浜一色町 16-35
TEL 059-332-1444　FAX 059-344-2627
E-mail：souchikusha@gmail.com　URL：https://tutikabe.net/

法衣・仏具製造及び販売
井筒法衣店
代表取締役社長 今岡規代
●本社
600-8468
京都市下京区堀川通
新花屋町角（西本願寺前）
Tel 075-351-1234
0120-075-720
Fax 075-341-7905
●東京店
160-0008
東京都新宿区四谷
三栄町十四番地三一
Tel 03-3358-1500
Fax 03-3359-8902
オンラインショップはこちらから →

「燈炬殿だより」

仏教文化講座特別展観

今年の夏は、堯猷上人が始められた仏教文化講座百回目の節目の年となります。そこで、今回の仏教文化講座特別展観は、上人の生い立ちと御業績に焦点を当てて、「Dr.堯猷　ドクトルギョウユウ」というタイトルで開催することといたしました。【7月24日（金）～9月27日（日）】

堯猷上人につきましては、慈祥法主殿が平成四（一九九二）年の第六十六回仏教文化講座の御親講の折に詳しく述べておられます。以下には、このご親講をも参考にさせていただきながら上人について紹介させていただきます。

堯猷上人は、幼名を鶴松と申され、明治五（一八七二）年、公家五摂家の一つ、近衛家の近衛忠房公の第三子としてお生まれになり、高田派専修寺に入室されました。

上人は明治十五（一八八二）年、十歳そこそこの頃、「浄土高僧和讃」について講義を受けられましたが、その時におつくりになったノートからは、鶴松様が幼少の頃から仏教や真宗学について熱心に学んでおられたことがうかがえます。

やがて鶴松様は、ヨーロッパに留学されます。鶴松様が堯熙上人に宛てた手紙には、「生海外に行くを得ば、かくのごとく勉強し、ドイツの大学に入り、哲学生、すなわちドクトル名称をうるは、生の目標とする処なり。」という一文があり、留学への決意が述べられています。

幕末から明治へと時代が大きく変化し、廃仏毀釈の荒波も経て、浄土真宗の諸派が、宗門の近代化を手掛けていた時代背景も留学を後押ししたのかもしれません。

鶴松様は、明治二十二（一八八九）年、本山を出発し、ドイツに留学されました。途中英語の習得に専念するためイギリスにも留学され、明治二十六（一八九三）年、ドイツに戻りストラースブルグ大学に入学、ロイマン教授の指導のもと「須磨提女経の翻訳および研究」の論文を提出し、ドクトル・デル・フィロゾフィーの称号を受けられました。明治三十（一八九七）年のことです。

須磨提女経には、次のような説話が述べられています。

「お釈迦様に祇園精舎を寄進したアナータピンダダ（給孤独長者）の娘であるスマガダー（須磨提女）は、嫁いだ先での異教の修行者たちに落胆し、姑に願い出て釈迦とその弟子の僧団を招いたところ、語られたことが素晴らしく、それに感化されて、人々は仏教に教化されました。」

須磨提女経は、インド仏教が小乗から大乗に推移していった頃の数多くの仏教説話の一つで、ヨーロッ

パ列強は、当時支配したアジア地域で、これらの説話を収集するとともに、十九世紀には、その研究が盛んになりましたが、これらの説話の多くは、いまだ研究が手つかずのままです。

その中で、サンスクリット語の写本の比較検討と、中国語の写本の翻訳も含まれたドクトル鶴松の博士論文は、優れた草分け的成果として現在でも様々な研究論文に引用されています。また、指導教官のロイマン教授は、この論文をハーバード大学に寄贈されており、教授が鶴松論文を高く評価していたことが伺えます。

鶴松時代の油絵肖像

堯猷上人の油絵肖像

留学を終えられた上人は、明治三十二（一八九九）年、専修寺に帰ってこられましたが、それを迎えた檀信徒の皆様の喜びがひとしおであったことは、当時の写真が如実に伝えています。

堯猷上人の墨蹟。プラークリット語で「涅槃に」と書かれています。

さて、上人は留学から帰ってこられてまもなく、得度され、この時点ではじめて堯猷と名乗られました。そして、留学で学ばれた知見を生かして、親鸞聖人の御教えのさらなる布教伝道につなげたいとの決意を次のように述べておられます。

「十有四年間、欧州留学に要したる巨額の学資を寄せられたる人々の厚意のほど深く満足感謝するところなり、余が多年海外にありて、日夜学事に黽勉（びんべん）してあえて怠らざりしものは将来その学術を実地に応用して専ら布教伝道に力を尽くさんと欲するに外ならず。」上人のこの御決意の一つの現れが今日まで百年続く仏教文化講座の創設につながったのではないでしょうか。

今回の特別展観では、鶴松時代の肖像画、堯猷上人になられてからの肖像画、また、留学当時の旅券やノート、さらにはプラークリット語やサンスクリット語で書かれた書などを展示、堯猷上人の御業績をしのばせていただきます。

ドクトルが
創めし講座
つくも超え

専修寺宝物館「燈炬殿」
館長　大野照文

お寺とともに地域をつくる。

人口減少社会へ突入した地域に必要なのは「お寺」だと思う。

対話から生まれる情報発信やプロモーションをサポートします！

三重に暮らす・旅するWEBマガジン
OTONAMIE
otonamie ＼14,500フォロワー突破！／
mail otonamie@gmail.com
tel 059-268-3538（壽印刷工業株式会社）
お寺の実績紹介記事

永田文昌堂

最新刊
顕浄土真実行文類述讃
満井　秀城著
定価6,600円（税込）
筆者が「行文類」において、「大行」の物体を、「名号」と見るか、「称名」と見るかを明らかにしながら、「標願」「細註」の持つ意義、本文で「大行」を明かされる部分、「他力釈」と「一乗海釈」などを詳しく解説する。

最新刊
ラジオde法話　そよ風のスケッチⅠ
土岐　慶正著
定価2,420円（税込）
本書は、FM「ラジオたかおか」で 2015年から2020年に放送された10分法話から59話を選び編集したもの。
主な内容として、福の神と貧乏神 / 仏の顔も三度 / 蓮如上人・嫁おどし / 蔓延する〝忖度〟 / 幽霊の話 / 相撲・女人禁制 / 四国遍路 / など。

京都市下京区花屋町通西洞院西入■TEL 075-371-6651■FAX 075-351-9031

第100回仏教文化講座のご案内

第100回という歴史を紡ぎ、次代へとつなぐ法灯

大法主猊下が仏教文化講座に御説示遊ばされる

本年八月、高田本山におきまして「第100回 仏教文化講座」を開催いたします。本講座は、寛文十二年（一六七二）に第十六世・堯円上人が始められた僧侶の研鑽の場である「安居（あんご）」を原型としています。大正十五年（一九二六）、第二十二世・堯猷上人の時に現在の名称となって以来、戦争や幾多の困難を乗り越え、長きにわたり教えを伝える大切な場として歩んできました。

この講座が百回を数えることは、お念仏の教えが一度も絶えることなく、「一器の水を一器に移すがごとく、絲毫（しごう）をへだてず」（器に入った水を別の器にそっくり移し替えるように、一点の曇りも、ごくわずかな違いもなく、聖人の教えが純粋なまま受け継がれてきた）に継承されてきた証に他なりません。この記念すべき節目に、私たちが数えきれないほど多くの「いのち」や願いのバトンを受け取って今ここに生かされている尊さを見つめ直し、阿弥陀様の温かな呼び声に耳を傾ける貴重な機会となれば幸いです。

※初日には法主殿による「御親講」が行われます。多分野の講師を招き「堯猷上人と近代仏教学の展開」という視点から、現代を問うお話を伺います。期間中、宝物館「燈炬殿（とうこでん）」にて特別展観も同時開催されますので、あわせてご覧ください。

【開催概要】

日時：八月一日～八月五日
（午前九時より正午頃まで）
（※初日は午前九時半より開講式）

会場：高田会館ホール
（三重県津市一身田町）

聴講：申し込み不要で、どなたでも自由にご参加いただけます。

【日程・講師紹介】

8／1（土）
講師　常磐井 慈祥 法主
講題　「堯猷上人の生涯と事蹟」

8／2（日）
講師　斎藤 明 先生
肩書　東京大学名誉教授
講題　「観音と観自在 ―堯猷上人による開講百年を記念して―」

8／3（月）
講師　野村 亨 先生
肩書　慶應義塾大学名誉教授
講題　「東南アジア仏教の諸相 ―上座部仏教と密教―」

8／4（火）
講師　碧海 寿広 先生
肩書　武蔵野大学教授
講題　「西洋の仏教との出会い ― 高楠順次郎と常磐井堯猷 ―」

8／5（水）
講師　栗原 廣海 先生
肩書　真宗高田派鑑学
講題　「仏教文化講座 100年の歴史と今後の展望」

「遇（あ）い難（がた）くして、いま遇うことを得たり」（親鸞聖人）

この百回目の節目が、皆様にとって新たな「気づき」と「喜び」の縁となりますよう。

合掌

たかだの風景

如来堂を守って来た大ケヤキ

本山両御堂が広大な基壇の上に建っていることは皆様も御存知でしょう。その規模は、東西百五十メートル、南北五十メートルを下らないでしょう。ここに膨大な量の盛土をして整地し、両御堂を建てましたが、如来堂側は湧水の多い軟弱な地盤のために困難を来たし、多大な費用と歳月を要したことは歴史的事実で、「勘六人柱伝承」もそこに由来します。

ところで、如来堂のすぐ北側には雲幽園の池が接しています。池の水面から如来堂の地盤までは二メートル以上の高さがあり、いかに大規模な土木工事が施されたかが判ります。そして、如来堂と池の間には大ケヤキが聳え立っています。一本が特に大きく、樹高二十五メートル程、幹回り三百六十五センチメートルにも及ぶ本山境内屈指の巨木で、栃木本寺の天然記念物の大ケヤキにも匹敵する大木できます。これらのケヤキは如来堂建立当初から池に接する北側の地盤安定のために計画的に植えられたものと私は考えています。ケヤキは深根性のため、土砂崩壊を防ぐためには有用だったに違いありません。この大ケヤキ、老木で、大きな枯れた幹があるものの、樹勢は旺盛で今年も爽やかな新緑を提供してくれています。本寺の大ケヤキと違い、所在が非公開エリアなので、見学して頂けないのは残念です。

私は、樹木の移植・植樹が趣味で、境内各所にケヤキや、ホオノキ、トチノキ、プラタナスなどを植え、その成長を楽しんで来ました。三十年以上前に本寺御影堂裏から採って来た三十センチ程のケヤキは今や樹高十五メートル程の大木に成長しましたが、反面、枯れてしまった木も数え切れません。唐門東や御影堂前の立派な松が枯死・伐採されてしまったことには心が痛みます。また、宗務院西側奥のケヤキは、私が依頼し、本寺の杉林の中にあったものを移植してもらったものです。本山へお参りの際は、是非樹木・草木にも関心と愛護の念を持って下さい。古木なら、何百年ものお参りの方のお念仏を聞いているのですから。

真宗高田派法主
常磐井慈祥

高田本山における節談説教布教大会によせて

節談説教研究会副会長　直林不退

来たる一〇月二八日、ご本山において節談説教布教大会（東海大会）が開筵されるはこびとなった。

真宗高田派寺院出身の著名な文豪丹羽文雄は、いくつかの作品の中で、自らの少年時代の記憶にもとづき、節談に支えられた法座盛況の情景をリアルに描写している。そこには、本堂に入りきれないほどのたくさんな同行が節談を聴聞し、その節と語りに共振し「ナマンダブツ、ナマンダブツ」と受け念仏する姿が、まるで目に浮かぶように綴られている。同時に、芸風説教が往々に陥りがちな落とし穴についても、近代的知性にねざす作家の鋭い視点から、冷徹に批判しているのだ。こうした丹羽作品は、文字に残りにくい生の布教現場の雰囲気を、私たちに伝えてくれる貴重な資料といえよう。

私たち節談説教研究会は、かつて節談が辿ってきた正負の歴史を認識することから出発した。つまり、往年の節談をそのまま弁ずるのではなく、現代人の胸に響く「お取り次ぎ」の構築をめざし、二十年近く多くの方々に支えられ歩みを続けさせていただいてきた。特にここ数年は、地域の布教現場で活躍できる説教者の養成と、より多くのお同行が節談に触れていただく機会として、北海道・東京・北陸・東海・近畿・広島・九州と各「地方大会」の充実を図っている。「地方大会」は、これまで浄土真宗各派の別院や一般寺院さらにはホールなどを会場として開催してきたけれども、大会会所としてご本山をお借りできたのは佛光寺様に続いて、今回が二回目である。もったいないご縁と頂くばかりだ。

今回最後に登壇する廣陵兼純師は、二〇一二年四月一五日専修寺様の親鸞聖人七五〇回遠忌報恩大法会大逮夜の御影堂での説教を拝命された。

大谷派・満覚寺
廣陵兼純師

五十年に一度の大切な勝縁に節談によるお取次ぎをお許しいただいた、高田派当局の英断には感謝のことばもない。さらに初夜勤行開始時間のせまる中、廣陵師のお説教を最後まで席を立たれずに熱心にお聴聞いただいた御法嗣殿（現在の御法主殿）の真摯なお姿を拝見して、眼がしらが熱くなった思い出がある。

この度のご縁においては、廣陵師に加え数名の節談を志す研究会員が、精一杯のお取次ぎをさせていただく。一人でも多くのお同行がたがご本山に参詣され、お聴聞いただくことを願ってやまない。

※詳細はこちら

法会・行事案内

- 第59回高田派婦人連合大会　六月七日
- 高田派青年の集い　六月二十日～二十一日
- 真宗高田派仏教保育講座　六月二十八日
- 至心院殿一周忌法会　七月六日～七日
- 第百回仏教文化講座　八月一日～五日
- 歓喜会　八月十四日～十六日

寺院名

世界中の多くの方々と仏縁を結ぶために、高田本山ではYouTube「専修寺チャンネル」をはじめ様々なデジタル技術を活用しています。国宝彫刻群などを動画などで紹介する「高田本山デジタルブック」もございますので、どうぞアクセスください。

YouTube
専修寺チャンネル

国宝公開　どこでもつながる国宝彫刻群
高田本山　デジタルブック　検索

http://www.senjuji.or.jp/nihonhaku/digitalbook/index.html?pNo=1